

## 指針

第 11 期 OB 内藤 節

エッセイを書こう。私がそう思い立ったのは、第 13 期の OB・OG 会誌担当者に指定された〆切日の当日である。1 度身に付いてしまった癖はなかなか治るものではないとよく言われるが、尻に火がつかないと物事に取り組まないという私の悪い癖も例にもれず、治そうと意識しているにもかかわらずなかなか治らない。全くだらしのない人間である。それはさておき、早くエッセイを書かなければならない。どうせ書くなら、現役生に対して何らかの指針を与えられるようなエッセイが書きたいものである。しかし、悲しいかな、良いアイデアが全く思い浮かばない。深刻なクリエイティビティ不足である。そんな自分に絶望して天を仰いだとき、本棚の 1 番上段に置かれている過去の OB・OG 会誌が視界に入った。そうだ、先人たちの知恵をお借りしよう。そう思って、私は、過去の OB・OG 会誌を手に取り読んでみた。OB・OG 会誌に載っているエッセイはどれも、OB・OG の方々の個性が光っており、読み物としてかなり面白い。少しだけ読むつもりが、気がついたら夢中になって読み耽ってしまっていた（現役生諸君！過去の会誌をぜひ読んでみよう！）。なるほど、社会人 1 年目の OB・OG の方々は、社会に出て働いている中で、小野ゼミで学んだことがいかに役に立っているかということについて書くことによって、現役生にはまだ理解できないゼミ活動の価値を伝えているようである。私も、このネタでエッセイを書くことによって、私のエッセイを読んだ現役生に対して、残されたゼミ生活をどのように過ごすべきであるかということについての指針を与えようではないか。そう思って、1 度大きく伸びをした後、仰々しく首と指の骨をポキポキと鳴らし、「よしっ」と一言漏らして指をキーボードに置いてしばらくした後、私は重大な事実を思い出した。私は留年していたのだ。社会に出て働くどころか、何の目的もなく延長されたモラトリアムというぬるま湯にどっぷりと浸かっている私が、このネタでエッセイが欠けるはずもない。ましてや、現役生に対して、偉そうに高説を垂れるなんてできやしない。なぜなら、同じ学生なのだから。早くも計画が頓挫してしまったところで、不本意ではあるが、現役生に対して何らかの指針を与えるというような高尚なエッセイを書くことは諦めよう。誠に遺憾である。

そういえば、冒頭にて私の悪い癖について触れたが、私が来春入社する会社の役員の方が、入社までにたくさんの良い癖を身に付けるように心掛けなさいというお話をしてくださったことを思い出した（決して今まで忘れていたわけではない）。悪い癖がなかなか治らないのと同様に、1 度身に付いた良い癖もなかなか消え去ることがなく、これからの君の人生に良い影響を与え続けてくれるはずであると。そして、良い癖とは、そんなに大した癖でなくとも、例えば、知り合いと出会ったら自分から挨拶をする癖や毎日靴を磨く癖といった、社会人として当たり前のことを当たり前にする癖で良いのだと。そういえば、就職活

動を通して出会う学生の中には、惚れ惚れしてしまうくらいに素晴らしい学生もいたのだが、当たり前のことが当たり前でできない学生の方が圧倒的に多かった。例えば、社員の方に挨拶をしなかったり、面接の集合時間に遅刻したり、しわだらけのジャケットを着てきたりと、様々である。もちろん、私は完璧かと言われたら完璧ではなく、むしろまだまだ至らない点の方が多いけれども、その私から見ても常識がなっていない学生が多かったのである。だからこそ、当たり前のことを当たり前でできるということは、社会人として働いていく上で、十分強みとなりうるはずである。よしっ、残されたモラトリアムの間に、できる限り多くの良い癖をつけて、社会という荒波に挑もうではないか。もちろん、悪い癖は排除して。

結局、このエッセイは、残されたモラトリアムを私がどのように過ごすかについての意思表示になってしまったが、結果とし、現役生に対して何らかの指針を与えられたのではないだろうか。自意識過剰である。



今年度、三田祭ブースに1番乗りしてドヤ顔する著者



11月に行われたICAMAにて、発表を終えた第12期生と先生と共に（著者は写真中央）